20230917　朝礼拝　フィレモンへの手紙１章４〜７節

「信仰の話って良いものだ」

毎週水曜日に行っている聖研祈祷会では、手紙を書いています。あて先は、『信徒の友』というキリスト教雑誌に載っている「日毎の糧」のコーナーから、聖研祈祷会当日に割り当てられている教会。これが１つ目、もう１つは、教会員の中で、最近お見掛けしてない方、ご病気の方、施設にご入所されている方、特別な御役を引き受けて下さった方などです。ただ、この「手紙を書く」と言うのは、言ってみれば、後付けのようなもので、実際に、重要なのは、「その教会や、その方を心に留めて祈る」という事です。そして、「お祈りさせてもらいました」という報告を兼ねて、「手紙を書く」わけです。なので、見方によっては「手紙を書く」ことは不要であるとも言えます。大事なのは、「お祈りをしたこと」。つまり、「神様に対して、教会や大切な人のことを祈り伝えた」ということが一番重要なわけで、その祈りを通した神様との対話を、わざわざ報告する必要はありません。「お祈り」は、本来、神様との関係において完結するものですから、「聖研祈祷会で心を合わせてみんなで祈った」ということだけで十分なのです。

けれど、祈ったからには、祈ったという事実を伝えたくなるのが人情ってものですよね。別に「祈ってあげたのだから、感謝してね」なんて恩着せがましいことは思いませんが、「神様に対して祈り伝えた」という事実だけでは、なんだか満たされない、そんな信仰者の正直な思いがあります。「あなたのことを憶えて祈りました」と、本人に伝えたいという願望があります。私は、こういうお仕事をするようになった最初は、その「祈ったことを相手に伝えたい」願望って、無粋だと思っていました。「祈り」に対する不純な感情であると。まぁ、真面目だったんですね。「お祈りってのは、神様との間で完結すれば、それで十分なんだ」ということを貫きたい、そんな気持ちがありま

した。でも、今は、「祈られて嬉しい」っていう相手の気持ちも大事だな、と思います。いや、もっと単純に、「わたしのことを心に思い浮かべて、考えてもらえた、関心をもって話題にしてもらえた」という、そういうことが、きっと嬉しいだろうな、と。

「祈る」「祈られる」というと、非常に宗教臭くて、まぁ、我々信仰者の間では、もう慣れっこのことですが、信仰について馴染みのない人にとっては「祈る」「祈られる」と言うのは、結構ハードルの高いものです。もしかしたら「気持ち悪い」と思う人もいるでしょう。多分、その気持ち悪さの原因は、「勝手に、宗教にくっつけられた」という感覚から来るのだと私は考えていますが、でも、「祈る」「祈られる」と言うのは、そもそも「大事なあなたのことを考えています」という、そういう意思表示、愛情表現なんだと思います。愛情表現ですね、「お祈り」っていうのは。それは、祈りの宛先である神様への愛情表現でもあるし、その祈り中で取り上げる教会や大事な人への愛情表現です。まぁ、愛情表現と言ってしまうと、それはそれで「気持ち悪い」って思われるかも知れませんが。そこは、キリスト教は愛情豊かな宗教なので、致し方ありません。

だから、もし私が誰かの祈りの内に取り上げられたなら、「あぁ、私って大事に思われてるんだなぁ」と感じます。こんな私でも価値ある者として受け止めてもらえているんだな、と。もっとも「有岡牧師がもっと一生懸命に頑張りますように」という祈りもあるかも知れませんが、それもそれで見限られず期待されているんだと思います。信仰者は、信仰があるがゆえに「祈る」という愛情表現をすることができる。そして、信仰のない人も、信仰者によって「祈られる」ことで、自分が愛され、自分は価値ある存在だと知ることができる。それって、とっても素敵なことだと思います。

だから、「信仰」があるって、良いことだなと思います。「祈る」ことができるって、本当に平和に繋がると思います。人を幸せにすると思います。その「祈り」が、叶うかどうかは、別にどうでもいいんです。ただ、神様に信頼を置く「信仰」によって、私たちが遠く離れた教会や、国や、社

会を心に留めて、遠く離れたあの人やこの人を慮って、「祈る」ということ、それ自体が本当に尊いのだと思います。「祈り」の源泉である「信仰」とは、神様に対する信頼であると同時に、自分の周りのすべての存在を受け止め、慮る、大切な「愛情」なのです。

今日の聖書箇所も、「信仰」の尊さを改めて感じさせるものです。「信仰」があるがゆえに、そこには感謝と愛と、交わりと慰めがあります。そして、最終的には「元気づけられる」のだと。あまり、「信仰」と元気って結びつかないように思えますが、どっちかって言うと、「信仰」って抑制的で閉じ込められている感じがしないでもないですが、でも、本当は「信仰」って、元気に繋がるんですよね。

祈り、祈られることで得られる「元気」があります。「聖研祈祷会で祈りを合わせました」という手紙で得られる元気があります。「信仰の話をする」というと、身構えてしまいますが、「信仰ってのはね、あなたの幸せを祈ることなんですよ」と言えば、ちょっとは敷居も下がるじゃないかと思います。信仰ってのはね、世界中の人が元気に暮らせるよう祈ることなんですよ、と。「わたしは、祈りの度に、あなたのことを思い起こして、いつもわたしの神に感謝しています」。この何気ない短い聖句は、でも、キリスト教信仰の大切なことを全部含んでいると思います。信仰と言うのは、神様にだけ向いているわけではなくて、「あなたのことを思い起こす」という、人間関係も大事なんですよね。

ただ、「あなたのことを思い起こす」だけでは足りないんだ、ということも大切なところです。「祈り」には、必ず宛先が必要です。日本の社交辞令の中でも「今後のご活躍をお祈りします」とか「ますますのご発展をご祈念申し上げます」とか言われますが、あれって、一体に誰に向かって、何に対して祈っているんでしょうね。そういう文章表現に出会う度に、その手紙の書き手の方の信仰について、ちょっと考えてしまいます。もちろん、そんな深い意味はないとは思いますけど。ただ、

やっぱり「祈り」には、あて先がないといけません。自分にはできないことを、誰かに、何かに委ねて祈るわけですから、あて先のない祈りは、依頼先のない注文みたいなものです。たとえば、お寿司が食べたくて寿司屋に電話すべきところを、ただ食卓について「お寿司が食べたい」と喋っただけでは、お寿司は永遠に届かないですよね。あて先のない祈りって、そんな感じなんじゃないかと思います。ただ、神様は優しくてすごい方なので、あて先の定まらない祈りも、御自ら進んで拾い上げて聞いて下さるとは思います。でも、だとしても、私たちは、何か大切なことを祈る時、大事なあの人のことを祈る時、その祈りがちゃんと神様のところに届くように、しっかりと「信仰」を持っていたいと思います。

神様という、私たちにはできないことがお出来なる方に、私たちは愛するすべてのことを委ねて祈ることができます。信仰がなければ、ただの「思い」や、ただの「感情」に完結してしまうことでも、信仰を持って祈ることで、それは神様を通して、あらゆる可能性を伴った願いになります。幸せや元気に繋がる祈願になります。祈ることも、信仰を持つことも、決して空を掴み、霞を食べるような、そんな無駄なことはありません。そこには、確かに感じられる喜びがあり、幸いがあり、元気があります。宣教や伝道という時、私たちが、伝えるべきは、神様の御名前と合わせて、この信仰に基づく喜びと幸いと元気なのだと思います。そして、それらは直接言葉にして伝えるよりも、私たちが、日頃から、それらを纏って生きることが大切です。まぁ、信仰者とは言え、常に天真爛漫に過ごすことはできませんが。でも、楽しそうに教会の話をしている、とか、嬉しそうに信仰を語っているとか、そういう一場面が、日常生活の中にあったらいいなと思います。

信仰と言う賜物を頂いた私たちが、その信仰を喜び、喜ぶからこそ人に伝えたくなる。そんな気持ちになれるように、祈りたいと思います。そして、祈りを通して伝えることのできる愛があることを、忘れないでいたいと思います。「信仰の話って良いものだ」と感じられるような毎日を過ご

すことができますように、願うものであります。お祈り致します。

神様。今日も、私たちのために尊い安息日を備えてくださり、ありがとうございます。日々忙しくなく過ごし、信仰や祈りから遠ざかることもある私たちも、今日だけは、あなたに心を向けて、賛美し祈りを捧げます。この日、この時が与えられたことに、心から感謝致します。どうか、神様。私たちが味わい感謝する、この信仰の恵みを、より多くの人と分かち合うことができますように。祈り、祈られることで得られる安らぎと喜びを分かち合うことができますように導いてください。

このお祈りを、我らの主イエス・キリストの御名によって、あなたの御前にお捧げ致します。